

第17回シリーズ：「特別支援教育の伸展（2）」

平成26年3月22日（土）

「ICTの活用と特別支援教育」

第2部講演 「児童生徒の主体的な授業参加を促すICT等の支援ツールの活用」

創価大学教育学部児童教育学科教授 藤原 義博氏

はじめに

今日お話しするのは、支援ツールという中でのICTの位置づけ、全国で話しているそのままなので、すでにお聞きになった方もおられるだろうが、学習、授業作りに、実際にどう活かされているのかということである。

これについては2月にこの取組みの発表をされた京都市立呉竹総合支援学校の事例をお見せして説明をする。

全国の特別支援学校の先生が取り組んでいらっしゃる授業の多様な狙い、それを達成するために、具体的にこのようなことができる、素晴らしい教育成果を生んでいるということを多くの先生方にお伝えし、教育成果を上げていただき、より広くより深く進めていただくということが私の務めだと考えている。

特別支援学校では、特別支援教育として主体性ということが大事な課題になる。そこで、どうすれば主体性をはぐくめるのか。主体性とは、自分の意思判断で、自ら責任をもって行動しようとする態度、このような3つの枠組み、意味を持つ主体性ということについて、どういう体験の積み重ねの結果、自ら意思・判断を持つことができるのかについて考えて見たい。

主体性を身につけるには

自ら責任をもって行動しようすると、すでに何らかの形でできる、できそうだと、いった体験をしているからこそ、こういう気持ちが出て、「だから、がんばろう」ということになる。そのものを体験したということではなくても、今までやったこと、ある程度努力して、最初はうまくいかなかったことでも、自分なりの努力でできたという体験をもつと、新しいことでもやってみようと思う。責任をもってするということも、体験の積み重ねである。なおかつ、知らないこと、体験していないことでも、こういうことをすればという学びのプロセス、身につけたプロセスがあれば、前に進めるものである。

大人が子どものときとなぜ態度が違うのか、大人になるまでに多様な場面での体験をしているからである。相手や場面に応じて態度を学んで、それを選んでやれてい

る。主体性を身につけるためには、それまでのいろいろな学びの体験の積み重ね、そこで得た経験のあり方、これがとても大事だということである。

ところが、できない・・・、わからないままでいると、やらない、やりたくないと避ける方向になって行く。

障害児の課題に対して

我々が対象とするお子さんは、障害を持っている。ここに体験や、「がんばろう、やろう」とか「やれる」というところに課題がある。そこで、主体性の3つの枠組みに当てはめて考えて見たい。

たとえば、新しいことをやる時、いったいつ、どこで、何を、どうするか、その手順は最初はわからない。しかし経験することでだんだんわかるようになる。なるほど、こうなるという結果を生み出さないと「こうなるんだ」ということがわからない

ところが、障害があるとき、どこかに課題があると、そこで詰まってしまうことがある。実際に努力してもうまくいかない、「どうなるの？」のままである。それができないと「もうできない」「やらない」「だめだ」となる。たとえば、「いつ、どこで」についての「手がかり」があるが、最初はうろろうしても、いったん学ぶとそうそう、いまだ、ここだったねとわかってくる。

ということは、手がかりが自分の中に残っている。残っていない状態というのもあるが、残っているものを使うことで、次の行動を導き出す手がかりとなる。教育のすべてがそうである。小さいときから重ねていって、大きく広げていくことができれば、主体的な姿に見えて来る。

ただし、行動に移っても、そこにうまく技能が身につかないことがある。また、最初どうしていいかわからないことになると、技能も身につけられない。そこで、「こうしてやるんだよ」と体験をさせるのは良いが、課題があつたり、苦手なことがあると、結果を出すのに時間がかかる。

1回では身につかない。そこにいたる結果が生み出せ

ない。技能的なところで、下手だったり、そこに理由があったりすると、結果を生み出せないということになり、そこでは価値観を見いだせない。結果を生み出せないということは、結局は避ける、諦めることになる。

支援の好循環

障害を持っている方は、軽度の方でもそうだが、放ったらかしになると、「もうやらない、できない」となってしまう。皆さんもそう、僕もそうだ。わからないと、そのままにしてしまう。

障害をもつお子さんは、ヘタをするとその部分にはまりこんでしまう。実際の障害状態でそうだと悪循環であり、持っている力が活かされないまま、重度化してしまうことになる。

こういうお子さんは課題がありつつも、「いつ、どこで」という理解力がある。しかし「なにをどうする」では技能が必要である。そして価値観が必要である。知的障害であれば、理解が難しい、技能も難しいと言う課題がある。

肢体不自由なら、どうか。自分の力だけでは、うまくいかない。だけど何らかの形で結果を生み出すことはできる。昔と違い、今の世の中は、どんどんそうになっている。

よく考えてほしいのは、皆さんも同じということ。わからないことでも道具を使うと簡単に結果を生み出すことができるということである。美味しい食べものも、簡単な道具で美味しいものを作り出すこともできる。それは自分の技能ではなく、便利な道具があると、結果が簡単に出来るのである。そうすると、やろうという方向にならないか、これが支援の部分である。

自分だけの力でなくても、そこに、わかりやすい、できやすい、結果を生みやすい何かがあると、この好循環を生み出すことができる。今そういったものが世の中で、ツールとしてある。しかもどんどんそうになっている。

我々は昔の人に比べて同じ期間生きていても、世の中で便利な物があるゆえに、多様な体験と多様な学びと広い体験をしている。そのことが、我々と障害を持っている方との共通的な繋ぎとなっているのである。我々の世の中で便利なものは、結果として、特別なものではなく、色々に体験の場面を広げている。障害のある方の支援の在り方でも、実際の力を育んで行く。なおかつ、それだけで助けられているかというところ、そうではない。使って結果が出るうちに、力も技能も高くなる。なぜ

か、それによって価値観を生み出し、もっとやりたいとなるからだ。文字もそうだった。そうなってくると、体験も広がり、学びが広がり、使う力も高まる。これが好循環である。

障害をもっているお子さんは、持っている力を活かさないでいることが多いが、好循環になると、子どもの持っている力を育んでいく。持っていない力を育むのではない。持っている力を育むという好循環になるのである。

その結果、どうなるか。可能性として障害が軽度になる。それが今の障害観でもある。そのことを本当に重ねてやり、一番大きな成果をあげているのは、教育なのだ。小さな頃から重ねているから、繰り返しになっている。

自分の持っている課題であっても、そこを助けてくれる便利な道具とか、いろいろな物や配慮などを活用すること、それが支援ツールなのである。

ツールの活用と授業改善

今は特別支援教育では、個に応じたニーズに対していろいろな力を補うための手だてに、具体的な物、多様なものがある。そういったものがすべて「ツール」となり、これの活用である。

ツールの活用を授業改善としてやるだけで、教育成果が変わった。結果を生み出した。しかも価値観を生み出すには、結果を生み出さなければだめなのである。この価値観、結果は、またその意味に気づかなければだめである。そこで評価が大事になる。これも重ねていかなくてはだめである。褒めただけではだめである。褒められても何を褒められているのか分からない。

そんな形で支援ツールとして具体的にどう使われているかが、下の表である。

支援ツール			
育 養 (準備)	直前の状況 (理解)	行 動 (実践)	直後結果と期末 (達成)
支援環境を整える ツール	自覚を促す子かみの ツール	実行を促ける ツール	評価の機会を提供 するツール
人的環境や物理的 環境を整え、主体的 行動を促すもの	いつ、どこで、なにを、 どのようにするのか を分かりやすくするも の	活動や課題を遂 行・実行する技能 や能力を補助し、 高めるもの	活動や課題の遂 行・実行結果を示 す機会をつくり、意 識を高めるもの
・サポートブック ・支援ツールの使い 方ノート ・移行ブックなど	・スケジュール表 ・手帳表 ・レジビ ・ソーシャル・ストー リー ・写真・カード・マー ク・チャイムなど	・ナンバー線画 ・直線をタイム ・コミュニケーション ツールのカード、プ ック、VOCなど ・作業道具・器具な ど	・交換結果ツール (チャレンジ日記、ガ ンバウ表・ノート) ・作業日記 ・自己記録表など

(表1)

こういったものを富山大学附属特別支援学校の先生や

大学の先生が協力して授業改善として考えていかれた。私はその活用部分をやってきた。そのおかげで、授業の成果があがると確認できた。表の下段を見ていただきたい。先ほども言ったが、スケジュール表は、僕らも皆さんも使っている。特別なことではない、わかりやすい、ということである。

その中の1つとして、例えばコミュニケーションツール、カード、ブック、VOCA などがある。

コミュニケーションの課題

コミュニケーションにしばって考えてみよう。すでに説明にもあったが、コミュニケーションで授業ということを見ると、それをまず説明しないといけない。子どもにはどうやっていいかわからない新しい体験だから、お子さんに伝えることが大切である。

知的障害のお子さんだとなかなか言葉だけでは伝わらないという課題がある。言葉による伝達だけで本当に伝わっているのか。言葉が分からない、理解が難しいお子さんと、正直にいつどこまで伝わっているかわからない。丁寧に言っても、わからない言葉はほとんど伝わらないだろう。先生が「見てね」とモデルを見せても、見ていない子もいる。モデルをしているときも、じっとしていないお子さんもいる。模倣が苦手なお子さんも多い。だからじっとしていない、見ていない。

聞いてない子も、顔をうかがうと、やはり伝わっていない。さらに、用意した「手がかり」、それも何の意味があるかわからなかったりする。そこに文字を書かれてもマークがあっても、僕らでも知らないマークだと何も分からない。

ということは、手がかりツールを有効に使わないと、機能しないということである。ツールを用意はしているが、よく見ると、機能するような使い方をしていないということである。

それと関係するのが、「手出し・口出し」である。口で言っているつもりでも、手を出してしまう。我々がやってしまう、ほとんどのことがそうである。3つのところを関係なくやっってしまう。

すると、子どもは先生が全部やってくれと、頼ってしまうのである。そうすると、まったくそこでは「手がかり」ツールは機能しなくなる。

多くの授業でも、そこに関わっている先生は丁寧な先生方であるが、先生方が悪いのではない。丁寧だからこそ、そこにはまり込んでしまう。

伝達手段における課題

- 言葉による伝達だけでしっかり伝わっているか？
- 師範(モデル)は本当に有効か？
- 用意した手がかりを有効に使っているか？
- 手出し・口出しに頼っていないか？

(表2)

我々は言葉で表出している。皆さんがいちばんわかりやすい手段は言葉なので、使ってしまう。あとは、身振り・手振りである。すると小さなことはあまり伝わっていないことになる。そこで、何らかの手立てで理解しているということになる。

問題行動の機能

先ほど、「だだをこねる」と言ったが、普通のお子さんでも、十分に言葉がない小さいときにしていることと同じことを、我々の対象の子どももしていた。これは発信だったのである。しかし、我々にとっては、問題となり、止めさせようということのみを考えていて伝わっていなかった。こんなことが最近、ようやく理解されるようになった。それが纏められたのが表3である。

問題行動の主な機能 (コミュニケーション機能)

- 注目の獲得**
 - ・ 注目や関わりを得ている(「みてみて」「かまって」)
- 逃避の獲得**
 - ・ 嫌なことから逃れている(「いやだ」「したくない」)
- 事物の獲得**
 - ・ 欲しいややりたいことを得ている(「ほしい」「やりたい」)
- 感覚の獲得**
 - ・ 感覚を得ている(「きもちいい」「たのしい」)

(表3)

問題行動の主な機能は、コミュニケーション機能だということである。問題行動をすることによって、ある意図を伝える。そういう意味があった。それだけでなく、そうすることで結果を得ていた。

どんな結果を得たのか。「注目の獲得」とは、問題行動をすることで、人の関わりを得ることができた。困っ

たことをすると、本当にほっておけないので、そばに行き「だめ」と押さえている。お子さんのそばに行き関わる。

関わって欲しいなと思えば、ぐっと押して「だめでしょ」と言われる。ちょっと嫌なことをやったら、「やめろ」と言われただけで関わりを得たことになる。この意味は同じである。我々もやっていることである。

「逃避」とある。嫌なことから逃れる、「嫌だ」「したくない」。赤ちゃんのときもそうだが、嫌なら泣く。これも言葉だが、大きくなると「情緒の安定」ということになり、嫌なものを避ける。また、そこから別の場所へつれて行くことが配慮となると言うが、実は嫌なことから逃れられている。「嫌」というのは、情緒の不安定だということであるが、「嫌」には理由がある。なぜ、嫌か。これを考えないで、ただ情緒の安定ということで、結局要求を満たしている事になる。嫌だから情緒の不安定、というのはおかしい。

主体性ということでも、何をするかわからないで、「やらない、やりたくない」ということがある。なぜいやなのかをよく考えてやらせてみると、ほとんどのケースで嫌がることはない。それどころか積極的になる。自閉症だからというのも、大嘘であった。全く逆であった。行動分析なので、臨床では、逆をやっていたのである。僕らも反省である。

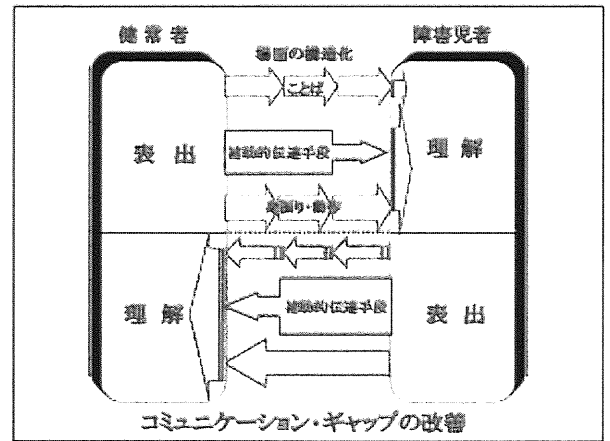
小さなお子さんはだだをこねることで、欲しいこと、やりたいことを得ている。それをやることで満たされる。結局、嫌なことから逃れられることも、欲しいこと、やりたいことをやってもらうことも、全部人が関わっていることである。

私が校長をしている学校の中学部、高等部のお子さんの例でも、iPadを使うと、けっこう安定して、逆にいろいろなと取り組んだり、活用している。これは、注目の獲得、得られる、取り除かれるということである。

補助的手段によるコミュニケーションギャップの改善

問題があれば、AACなどの代替手段を用い、これに代わる適切な行動で本人がきちんと伝達することができれば、問題行動をしなくても適切に伝えることができる。iPad等の機器が本人の技能や、言葉では言えない表現でも、文字などで代替可能になったとき、問題行動をしなくてすむ。このようなケースは多く見られる。も

しくは、問題に至る前に、そういった手段で自分の思いが伝えられたり、得られるようになったら、問題行動を起こす必要がなくなる。



(表4)

このように世の中も問題行動の意味を含めて、いろいろとツールが大事になっている。

我々、皆さんも大事なことは言葉だけで伝えにくいときは、相手が理解できるいろいろな補助的手段を考える必要がある。

その1つとして、ICTという道具、こういったものの活用により、大いに伝達しやすくなる。我々も多様な機器を使い、言葉だけではなく、分かりやすく情報を得ることが可能になっている。私も大きく助かっている。

障害のあるお子さんの表出も代替行動という伝達手段を用いて伝達している。言葉で十分できなくても、本人の力を使い、しかもそこに補助的手段を媒体にすることで、我々に意図が伝わる。こうなると、より積極的に伝えようとする。この関係が人との関わり、これが好循環になり、さらに拡大していく。その結果として、コミュニケーション技能も高く広がる可能性がある。そうなった場合の補助的伝達手段が大切である。

障害者のためにというより、我々のために作ったものが、結果としてそうなったことがある。携帯のメールである。メールにより聴覚障害者にも場所にとらわれずに同等にどの場所でも伝達できるようになった。こういうことが広がっているのである。

自立と主体性を育む授業

京都市立呉竹総合支援学校の例を紹介する。意思表出の手段として、携帯情報端末、大型TV、OAKスイッチなどを活用している。肢体不自由クラスで操作をしているのは先生ではない。いろんな所に、それぞれのお子

さんの機能に応じたものがあり、それにより発信をする。肢体不自由のお子さんが主体的に相互に取り組んでいる。1人1人違うが、それぞれの持つ随意的な機能を生かした形で、相互にこれを介してやりとりが繋がって行く。

自立と主体性をはぐくむ授業展開について、少し考察して見たい。授業の補強は、目標や内容などをより高く・広くすること。主体的参加をどう促進していくか。興味・関心を引き出すにも「引き出す・育む」と考える。広がらないからこそ、興味・関心を持ってないことについて、様々な手段を用いて関心を引き出して行く。そして、その中で充足感・達成感を生み出すこと。そこに価値観を見いだせなければダメである。いかに価値観を見いだせるか。かえって丁寧にやって、生み出せないということになるのはだめである。

参加の機会が十分だろうか。学習の機会は十分か。そして、やりとりの機会、これも十分か、こういったものが大事である。結果についても満たさなければいけない。価値観も見いださなければいけない。

授業展開で気付いたのは、待つ時間が多すぎることである。「待つ時間を減らす」ということを考えるに、教材・教具の準備・片付けを利用する。準備することが学びになる。準備して、それを片付けるということを繰り返すと、次はこうすると見通しを持つ手がかりとなり、結果を生み出す。積極的にどんどんやるようになり、丁寧に扱うようになる。

なおかつ、1人だけではなくみんなでやる。これも意味があった。たったこれだけで、すばらしいやりとりになる。

教材・教具で学びの機会が生まれる。子どもたちが本当に主体性を持ち、その中で多くの育みがある。子どもたちがどんどんやっていくと、本当に、狙いが高く、広がって行くのである。

そして、振り返りが大事である。授業の最後で評価しても、いったい何を評価されているか分からないお子さんが多い。そこで、授業展開での多様多様な評価が必要となる。

評価も先生だけではなく、生徒同士で、もしくは自分で出来る。上手だと言っても、何を褒めているのか分からない。ところが、言葉だけで伝わらなくても、例えば、デジタルカメラ、「iPad」や携帯電話、たった1台で撮ったものを自分で確認できる。しかも生徒同士でも

「これ見て、どう思う?」「いいよね、すてきだよね」とか、「あ、うまい」とか。

我々に便利なものが子どもたちにとっても便利で、いろいろな機能を持つようになって、授業展開でもいろいろと役に立っている。授業展開では、参加を深め、知識・技能を活用し、獲得する、その繰り返しである。授業展開で繰り返すことが多様にできることに繋がる。

「学びあう」ことで、仲間同士で行っていくと多様なことが生まれ、この多様なことが、大きな狙いの広がりにもつながる。それを重ねていくことが大事である。

物がいろいろな学びの機会を生み出し、手がかりにもなって行く。同時に先生の役割が変わるということである。それが日常生活の繋がりになると、まさに日常生活のあり方を学んでいることでもある。それ自体が、特別支援教育の大きなねらいである。このツール、これが使えるようになると、授業と日常、これからの社会生活に繋がるツールになる。

プレゼンテーションの重要性

苦手なプレゼンテーションが大事である。道具をていねいに使ってくると、プレゼンテーションができるようにもなった。大事なことは、互いに向き合い、支え合うことである。プレゼンテーションも儀式的にやって、先生の顔色を見ているだけではだめで、仲間に伝わるように、お互いがしっかりといろいろな学び合いになる、それが本当のプレゼンである。相互に伝わらないとだめである。コミュニケーション、伝え方に問題のあるお子さんは、普通はプレゼンを避ける傾向にあるが、いろいろなツールを使うことにより内容がわかりやすく伝わるのが可能になる。

「プレゼンテーション」(発表)

「プレゼンテーション」の意義:

- ・ 情報の公開や提供
- ・ 「知的遊戯」の情報共有機会
- ・ 「対人的事務的状況」を育みつづける成長の機会

留意点: 「互いにしっかりと向き合って支え合う」こと

- ・ 一方で形式的・儀式的な体験機会であっても意味がない
- ・ 即ち立って聴衆の支那や受けながらのは儀式的
- ・ 伝える聞き手を見ないで、書かれた文章を機械だけのプレゼンテーションなど

目標のポイント

- ・ 聞き手のすべての状態を理解し伝え方を考える
- ・ 聞き手にわかるように伝えることを意識させる
- ・ 聞き手と話し合いと聴取のやりとりを行わせる

多様な教材を使って、内容が伝わりやすく、伝えやすいプレゼンテーションを

- ・ カード等の伝達する内容を具体的に示した掲示物
- ・ パソコンと投影プロジェクターやICTなどの活用

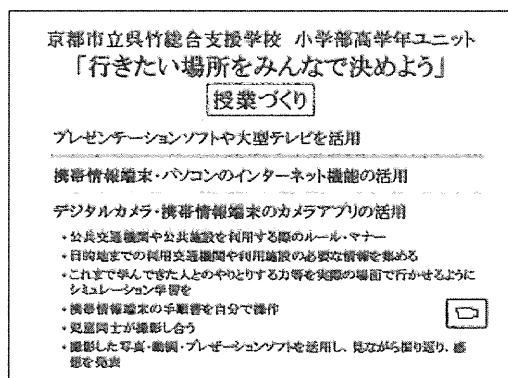
(表5)

小学部の高学年の授業でも、目標は携帯情報端末を使用してとある。プレゼンテーションソフトの活用、大型

テレビ、携帯、情報端末、パソコン、インターネットの機能の活用、カメラなど、その中で、ルール、マナーを覚えて行く。手順書も自分でつくる。児童同士で撮影をし、振り返り、発表する。

実際どんなふうに活用したのか。

このクラスは、自閉症、知的障害、肢体不自由のお子さんが協同的にやっている。発表にiPadを使っている。評価をするのに、撮影係がここにいて撮影してる。別のお子さんは、発表のツールを使っており、右上には音声が出ている。



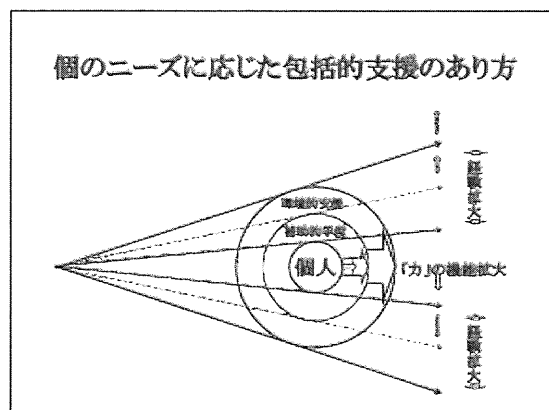
(表6)

いろいろな手順表を自分たちで作ったりする、生徒が撮影したものを使って評価する。まだ言葉が十分でないお子さんも、自分たちで撮ったものを使って、実際にいろいろな機能を使って発表のための資料を作っている。それぞれのお子さんが、障害の機能が違うにもかかわらず、同じ物を使っていろんな使い方をしている。自閉傾向の強いお子さんは、文字はかけないけど入力している。いろいろな働きをたった1台でやったり、多様なものを使ったりしている。

まとめ

今まで、授業改善を見てきたが、環境的支援、ニーズに応じた支援の中で、結果として先生の役割も代わってきた。

環境的支援として、できない状況におかれがちな子どもにできる状況づくりをする。状況づくり、これがとても大事である。「分かって動ける環境作り」である。これは、決して生徒だけではなく、教える先生にとっても支援になるということだ。そういったものを十分に整えて行くほど、皆さん方が狙いとするものを育み、伝えやすくなる。



(表7)

こういう手段の中で機能的に何が変わるのか。実は周りの環境により体験が変わる。さらに環境のあり方を変えることで、それができやすくなる。この大きさが大きく変わることになる。自分の力だけだと狭い形だったが、このように機能的に拡大することで循環を変えていくことにより、この広さ、これこそが成果になる。

これを1年生から6年生までどれだけ広くすることができるのか。環境を支援的に整えていけば、実は、すばらしい成長の姿を見ることが出来る。これを確認した。まだエンドは見いだせていないが、多くの実践の成果を皆さんにお伝えしていきたいと思う。